

草木育種後編

上

大政官文庫			
		和	
		書	
四	五	九	四
冊	架	函	類

內閣文庫			
一	二	和	
三	六	書	
函	四		
六	冊	號	類
架	冊	號	類

內閣文庫	
番號	和 11641
冊數	4 (3)
函號	183 235



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM, Kodak



櫟齋阿部先生著

草木育種後編

江戸書肆

千鍾房
玉山堂 發閱
萬笈堂



掛より人も畏く... 種ふきき... 櫟齋先生著
神の奇く... 伊那那
岐伊那那美二大神... 出す... 大八
島玉を始め... 神... 生... 木... 祖
久々能智の命草の祖... 命を生...
よりお鷹... 春山の... 久方の...
... 秋野の... 引...
目も... 二柱の... 神の...

草木育種後編 序

日さすに 師木島の我大所正 中い美もいん
 言さく 唐玉人 喜夏秋冬のはちり紙ん
 阿部喜任 木音のさのあゝのさの
 ありなる 考(福)のさののねら(福)
 くらなる せいのさのさのさのさの
 つまの世のさのさのさのさのさの
 とも岩崎常 ぶる木音種といつる 二小巻をさる

日木もさる せいのさのさのさのさの
 みその猿 繩二巻をちん 喜任うさのひらるん
 うさのさのさのさのさのさのさのさの
 をあらる 考人さる 世の木村のさの
 んのさのさのさのさのさのさのさの
 つらひのさのさのさのさのさのさの
 つまのさのさのさのさのさのさの
 やと思ふ ねらおのれ 又年迄 ちのさのさの



狭き窓より多しおるしとくある星のあつ
 あらより申つたのぼくよらるまきしを井
 ちもらしつわらあよせぬを常のつと
 けを去るに東の海つ路より内とん都の
 師木島の大和玉神風の伴勢國ちと行えり
 つ三まらるる伝流路より此大江たより
 道し聖山よしも人の家よおほし
 あらうのなれぬ木竹のたけしきくあつた

草木育種後編卷之上

初目

- 皇國園庭と似るの始 州本の性質と偽
- 澆灌之事
- 培壅之事 付
- 下種之事
- 接換之事 英二園
- 扦插 英一 歷條之事 英二園
- 移栽之事 諸本仕立之事
- 雪霜忌避之事

大樹の分岐之事 樹木と伐事

盆栽之事

瓶花之事

催花之事

瓶入り之事

貴客と活する事

諸州採茶之むね

長巻

茶穀果茶花竹手入之法

草木育種後編

例言

○前編既草木と培養の法と記しつゝ亦遺漏はしとせし此書亦
茶編に倣ひ教件目と分ちて其遺漏を記し

○此書初穀菜と記し小果木茶花竹手入挿花瓶花の之を考て
しるは其中於漏る所ありは後編と記す補ふべし

○和名と考て漢名とせざるは未だ尚書決せざるものなり因史に
載るを和名とし一方にそのものと俗名とす又近世西洋の學行は
てより茶枝頗其稱味と記して其なり今を系名と記し其尚
書と明らむ

草木育種後編

目録

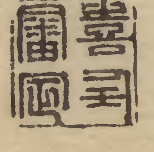
上

○澤名とて通稱するものあり海棠伴子楸の類あり蕃名より味
 りのりホシホロエニスタの如く皆其地方より来りて
 本邦に蕃殖
 せりものあり

○澤名異稱和名方々其二三と著しは名を物矣あるを既せし
 り一且其を出和と記して其系をあらわしむ澤名の下に本州と云す
 李東鑑の本州総目み出さるりものと知るべし

○上卷十九則下卷百六十則保護清流源運件これと記すとのやも余
 の味候必不捨の弊ありて一と撃て十を従は減者幸ひふせ

丁巳之秋月移花日巳菽園主人識



草木育種後編卷之上

江戸 櫛齋 阿部喜任 曾粹

皇國園庭を代る事

日本書紀云推古天皇二十年自百濟國有化來者其身皆班白
 云云亦臣有小才能構山岳之形其留臣而用則為國有利何空
 之弃海嶋耶於是聽其辭以不弃仍令構須彌山形及吳橋於南
 庭といり同三十四年五日庭中開小池仍興小嶋於池中○棠
 花物流り後一條院云く柳乃代りてと内は兼しせ給りて
 木枝を治とてくありて是清涼殿の蓋に植させ給り○禁中
 御抄天徳四〇十二月十八日栽紅梅於中殿良角○古今著聞

集に長元元年十二月廿二日照陽舎の橋と清涼殿の庭に
植へたる枝葉略記に延長四年九月廿日清涼殿前栽菊○
喜任曰空園古より樹木茂愛玩すること久し

草木の性質と福也

喜任按曰造化無全功物無全美豐其花者嗇其實豐其實者嗇
其花天地の物を生ずる莫不兩全なり牡丹海棠其実合ふ處
うづば折申梅掛其花絶るべし州木の性各異あり植る不天
の對あり此乃宜なり直古なり移古なり考工記曰橘踰崖而
北為枳鸚鵡不踰濟貉踰沃則死此地氣然也○草木を移すは
南水寒温の宜と不宣とあり其地は宜しうくざる者之は植

て毛葉へぞ或枯槁不ぶる又春熟する有り夏熟する有り秋
冬不ぶる熟する有り是皆其性質の異なるなり○雷首山人
の百花種藝云凡そ人家園庭の草木ハ元來其地不生たる
者鮮し多くハ他方より移し植るりのゆゑに其形色山谷の州
木に不及と多し故に人家に植るりの其種法を述べれば
多くハ榮へがく所謂草木地と易く生ずるとありは
我達とも亦法ありと云乃ハ養育するの法なり蓋し種植の爲
とあり人み有り風雨の爲と云る天に有り天乃爲す
此のまゝなるものも山谷之人乃爲此のまゝなるものハ園庭に
園庭を人作り天は代りて或は風雨となり或ハ雷震となり

是を以て生苔一是と損残す亦天時と奪一暴風之雨と防ぎ
 地宜と考へて水濕燥熱と苔子一草木各其性情に順ひ治さ
 ず山谷乃景物に清るりの多しけのぬくする所むの人切なり
 又彼枝條成屋曲し或を剪伐して整頓するは其性質小負
 じ乃て人とのみく壁れを只生得乃俟よく成長す速く多くハ
 人乃を辨へて我俾たる癖りのとちりて用ふるは能ハば枝
 に聖賢教を設て制戒成道するは終て天地自然乃性のす
 こと乃て捨並時ハ種々の疾病瘳くを終てハ治療の術を及
 び難し一〇在任按日草木各其性のりのとつたを亦天地間乃
 一造物なりて一本一州各受治する性質ありて其性質と考へ

辨へて或を裁く或を戒りて各其法を施し草木として各其
 性を養ふ一むる是花師園丁乃の業なりは花を十分に養
 化を極めて其馥郁と散し果實ハ十分小熟して其芳味を写
 以是利天地乃化育を助くるなりは亦よくは道理を達て草
 木と培苔千州草木一々業に向ざるなり

澆灌得宜の事

花鏡曰澆澆之於花木猶人之需飲食也不可太饑亦不可太飽
 燥則潤之瘠則肥之全賴治圃者不時權衡之〇凡養花木時
 水水と澆き肥と用ひ秋冬草木黃落の時ハ多しすて重なり
 草木と毛末葉の馥郁を秋冬乃培苔小ありて熟知へ一盆栽

せりて用ふべし... 穀にうる患を去て... 初とす

培壅事

韓詩外傳云孔子曰夫土者掘之得甘泉焉樹之得五穀焉在任
按ふ去積莠物を生し人命の系するは百果州本於土又地より
生せざるは地を肥せしめ地にうる肥濟り水に空冷浸鹹り
人力の滋培各其厚きを与えれば百果を以て其く能くして
業ふふ白くしりべけんや古く小いも土師の教園に必だ肥を將ふ
るをりとすべし下條に肥の毛ふへしりた教器を著く用るその
其好魚よまのする

○本肥といふ人糞十升水十升合せ糞窖の中に行き壺りの地
陳氏云塘水と和せれば佳水不穢るといふ

○下肥といふ合汁一升水三升和し行るりのたり

○水肥といふ人糞一升水七升和し行るりのたり

○魚肥 即魚腥魚水といふも曰く魚の腸又肉又洗ひたるを
行き壺りのたり是亦和し行る用ふべし

○鯿魚 鯿魚 之と桶のうちに行き腐りたる水不和し用ひる

よし海辺のりのおど別しては又ごまのハ水州の指しよしては
一番の種七つ位二番の種六つ位弁の種大先にならして用ふべし
又之を細末とて土と和して栽るものは老り一日教とがし色く

腐しつれば各家程のくわに堀出さるる子なるべし

○木魚清俗 細末と煮しあつと去る二兩日過て蘭乾又係

ひのりのにかくつ用ひてより

○馬屎 乾し細くふし一升お水七升合け六合斗の進ねり

一重用ふ迄異月用ぬれば土乾らざりてより又孟裁孟裁も冬月用

ふれば害中より乾らばしとより

○佐油糟 根りとがしつ重てより自然雨又かけぬにと

けりより孟裁の根と重をよる

○豆肥 大豆一斗お二斗の進せり茶茶て行へ重へし澆ぐ時

ふけお一升おおのふ二升と合せ用ふべし茶乾茶乾小水多く和

てより大壺の中に豆二升水二升斗りも入壺腐りたる時お成和

して澆ぎおする時又池の水等と多く入壺又七八日と過て用ひべし

一斗お豆一升つと重も入壺重けは孟裁七八百の肥しより十多し

且滋味と忌りのお用ひてより○初て肥と用ふるお土乾さるる時

をわけ乾くりのおかゝ澆し十日と過て肥と用ふるお土乾さるる時

根先痛むあり花鏡花鏡二月樹已發嫩條必生新根澆肥則梢反


枯とこれをお新根肥おたゞればなり又云有萌未發者澆之不礙

と萌芽未出萌芽未出づれば新根も生せざる有なり

下種之事

花鏡曰臨下時核宜排子宜撒必於日中燥爆潔淨然後合浸者

浸之不浸者看其子粗則培入土内細則均撒土面又曰下後三
 五日必須得雨旱則不生遇旱須頻澆水○喜任按子種子一
 の卵まぐ七中にありて生育するものなり亦於各類の卵數十日後
 経てもそ生活の力と中合ひがや○灌園先生云春日熟する
 實を秋蒔秋月熟するものハ蒔蒔の多し播蒔とて熟したる
 實とくすくは極まは並に生じ播蒔把等なり○喜任云花鏡曰
 若佳果欲種須候肉爛和核排種之これよりすきの法なり灌園
 先生云蒔蒔ハ加條本は生槌系樹ハ生せば倍小くさく飛ぶた
 らむつ四月の比実熟しつるより梨花海棠林檎松根等乃
 樹皮ハ實と付て垂下根と生じ樹皮ハ粘着して後に葉を生じ又

を州を松がみ江戸花肝をそつは松とつるものなり大葉小葉二種
 あり大葉のりのハ葉柯樹の如く小葉のりのハ葉石血に似たり二種
 ともに夏月紅花と開き形蔓蘿に似たり後小実と結ぶ其実熟
 したるとり赤松ハ粘着して垂く時ハ芽を生じ 在任按是即の經
 ○又駿州ハ松山茶葉に生じる寄生のり形扁柏に似たりこのりの
 寄生したるとひのき山茶とつる 寛保年中將箱先生於麻柳宮村より
 一名ゆわつなき 灌園先生云此木の下諸の常盤木と栽垂ハ実落
 て自ら寄生と生はるゝ実と撰ぶハ中ハの実と上ハ枝付実
 ハ下品なり  圓の如く枝の實と栽れハ根不立を生じて
 頗多し半房なり又多きハ枝の實なり茶葉もも獨活花活白芷

徒然令我菊苗草不憚 上上用 くれ奉邦邦もも續本續本のの喬喬一花鏡曰如
 樹發生時或將黃落時皆宜接換大約春分前秋分後是其脱胎
 換骨之候也凡樹生二三年者易接云云○貝系花譜云樹とく
 日切ての方方南南にむくふるはさきさきを枝枝ときうて客本客本とく
 べし実多し日けの枝と利むべし接木の枝とを方方ううを雲
 するに小小新新ふと入枝と横横ううみてより数十日とへてくれとこつ
 在任接在任接今今ハハ花花菊菊とときうきうこれこれ接接とと折折ととをを送送うう又又かかして
 ぬ新新ふ切切ううととるるのの小小日日一一つつ貝貝系系云云接接木木ののたたけけううひひここ出出
 せぬくつみさうべし接改接改つつをを後後ににかかううけてけてひひととままととつつととるる
 べしうう一一ととままととふふれれははつつをを枯枯るる或或ははつつけてけてととせせんん○在任接

日日枯枯よりより芽芽をを生生ずずるる時時ハハ枯枯もも新新接接をを生生ずずるる夜夜ハハ勢勢よりより必必ず
 じうじうととるるののたたれれとと毛毛ううふふ又又少少しし又又合合ててよよきき湯湯ももややりり考考べべ
 接接ややもも勢勢よよきき時時枯枯芽芽をを生生ずずるる一一つつににかかしし重重きき芽芽ははみみすするる及及
 ぶぶ時時切切りりををるるべし○灌園先生云法本法本ももにに表表かかくく暖暖れれてて
 枯枯よりより枝枝幹幹へへ精精氣氣ののあありりてて芽芽未未破破進進ぶぶるる時時ををよりより一一ととはは友友ハハ法法
 本本ををりり葉葉とと生生ずずるる十六六日十六六日前前日日はは接接ててよりより一一ととはは友友ハハ法法
 種種とと樹樹皮皮不不破破とと接接くくりりゆゆりり枯枯ハハ比比翼翼をを扁扁柏柏花花柏柏等等にに接接折折
 極極ままれればばつつくくああひひとと日日陰陰不不重重ささくくききううとと吹吹ううけてけてよりより○在任
 按按しし倍倍ははむむををのの芽芽接接ととつつかかれれたりたり四月四月のの比比新新葉葉出出るる芽芽のの先先みみ分分斗斗りり切切ててああ方方ととままぎぎ枯枯のの皮皮ととかかへへぎぎ其其ららへへととままみ

其圖のい



ひを枝大木へ接し而天後、ワラうがう友よ
 ぼく接ひの木
 さやう葉の葉生
 の根の上つくや
 接、うびるやかへ接
 早く大木とある枝
 接、大木の枝へ接
 なる種、ふきが
 止よむ接にせれば
 種大よと



灌園 嫡 源信正画

志賀南天挿接之圖

楓侯馬島



竹の皮を剥き
去ては折る
てよ

扦插之率

花鏡曰草木之有扦插雖賣花傭之取巧捷徑法然亦有至理存焉凡未扦插時先取肥地熟剗細土成畦用水滲定待二三月間樹木芽蘖將出時須揀肥旺發條如拇指大者斷長一尺五寸許每條下削成馬耳狀別以杖刺土成孔約深五六寸然後將花條插入孔中築令土著木每穴相去尺餘稀密相等常澆令潤澤不可使之乾燥夏搭矮棚蔽日至冬則換暖蔭仲春方去候其長成高樹始可移栽每欲扦插必過天陰方可動手○又曰若扦插薔薇木香月季及諸色藤本花條必在驚蟄前後揀嫩枝斫下長二尺許用指甲刮去枝下皮三四分挿於背陰之處四旁築實不動其

○竹柏たけぼしは四月より六月迄のうち管にきううとせよ。あせ氏あせは六月
月上旬より中旬をよ。このふつをめりち山菜やまなを茶梅ちやまのふわ
新芽しんがのたまうたる比お杆こゝろしてよ。去年のある枝えだは六分斗り付
てよ。山菜やまなの近來きんらい枝えだに糸いとをつけ枝えだをさす枝えだうとがせよ。

○英揚ひげ木き狗骨いらいきの類るいは二月の比枝えだも多おほく切りす。新しんの如ごとくして濕地しつち
に杆こゝろすべ。羅洋らやう松しょう芽めのゆるむ時とき之又また新芽しんがのたまうたる時ときよ。

○映山えいざん紅こうけの類るい又また冬ふゆの類るいも正月しょうげつよく杆こゝろしてよ。
杜鵑たぎん花はな琉球りゅうきゅう類るいは六月上旬より中旬の比をよ。

○柏かしわさちやがひを糸いとすたの類るい糸いとに痛いたむ糸いと赤あかくたうとらるが素葉すゑ

叢生そうせいの糸いとどほく色いろ常に皮かわしきみする比ひよ。糸いと根ねは古枝ふるえだと六月ろくがつ分
付つけ日向ひなたよ。水みづを夜よるに澆やうぎてよ。花はな細こ柏かしわ性の糸いとすたは二月にがつ杆こゝろ
たうとらる。凡おほの比ひより日向ひなたおせ。とくよ。むよ。ひをむ花はな細こ柏かしわ乃すなはち
あてふもよ。二月にがつより四月しがつを又また八月はちがつ杆こゝろしてよ。杉すぎも木の糸いとを素す
くたうてよ。十月じゅうがつ斗とりてよ。杆こゝろして活かす又また秋あき分ぶん前まへに杆こゝろしておとよ
け並ならは活かして勢いきりよ。

○南天なんてん竺しやく分ぶん前まへ後ご二芽にがうけ管かんせきは一芽いちがよ。もよ。五杆ごかん元陽げんやう
地ちよ。一杆いちかん杆こゝろする天てん肉にくか入い込こべ。小糸せういとの糸いと合あ糸いとの類るいは秋あき乃すなはち
彼か存ぞんあまふ杆こゝろしてよ。すお並ならては梅うめを日向ひなたの糸いと條じょうと立た春はる
より十月じゅうがつ斗とりてよ。杆こゝろしてよ。梅うめも彼か存ぞん梅うめむけ時とき管かんてよ。

時ときのよき時とき根ねの四よつをち握ねり根ねを切きて元の如ごとく土つちをうけ金かね枝えだも少すくし
 きう重おも束たば手にむく枝えだをきりきり多おほ量りょうしつる根ねを皆みな伐きして繩なわ
 につくき土つちの落おちぬやうにすく板いた植うて根ねの下したの面めんにうくやうに
 持もて突つのべり又また根ねの上うへ細こまき土つちをうけ水みづを多おほく入いれうく持もて
 突つのべりて根ねのうへ入いるこれとあうをうけ水みづを多おほく入いれうく持もて
 小こ物ものは八や日にちうく土つちの如ごとく荒あげと一度いちど植うてうるものとにじとじ
 〇在あ任に按おし先ま花はな鏡かがみ不ふ精せい深ふかきうこれ六む時じ苗なわ不ふかつて後のち移うつして
 活かつし易やすしとれと多おほ量りょう中ちゆう要よう天てんの雨あめにうけて落おち系けいするものハ五月ご月げつ芽め
 の未いま生ませざる前まへ二に月げつ三さん月げつの比ひ秋あきハ落おち葉はしつる後のち九く月げつ十じゅう月げつの如ごとく
 冬ふゆ木きの如ごとく新しん芽めと生ましてうくうくうく此こゝ四よ月げつより一いち月げつハ二に葉はと生ま

四月しがつの如ごとく高たか州しゅう厚こう朴はくは四月しがつより

〇草くさの類るいハ葉はハ折やぶの芽め未いまわかれざる時ときより四よ日にちより七しち日にち後のちは
 へハ葉は枯かれ土つちの落おちる時ときは土つち系けいにうく次つぎ芽め不ふ同どうなる
 心こゝろの如ごとく

附つ諸しよ木ぼく植う土つち仕し立たて方かたの事こと

梅うめハ葉は被ひ落おちぬ條じょうをきり根ねも折やぶらるる程ほどふきうつり根ね植うて
 盆ぼんへ芽め出でる以もて植うて十六じゅうろく日にち斗とり過すて水みづ肥ひ一いち交こう又また六む七しち日にち
 過すて一いち度どうけよう水みづ乾かわけハ系けい落おちるやうに土つち用よう前まへハ落おち葉はを
 付つけ又また肥ひるやうに土つち用よう芽め出でて花はな付つく土つち用よう的てきに十日じゅうにち斗とり過すて水みづ肥ひ一いち交こう
 又また十じゅう日にち斗とり過すて一いち度ど澆やうぎをよう土つち系けいも落おち花はな格かく別べつの如ごとく

ありけり。冬に生ひしすくろくすくろく一日に二度まで澆ぎては
 ○梅根ハ接て畑より芽の出る比より曲冬之初は堀りては並べ
 すべきかとふきりほりてより梅根枝先をまけてより切るはわり
 して并木接木ともにまかふよりより

○梅根の類ハ核と古木埋かきまかふ茶小畑植てより一月
 の比の比に來まひ月ありは根を切りてはまの彼者乃以本植

○標機乃類をま乃彼者茶多埋並くる実と畑小植付て芽を
 夏ふふり糞汁と澆ぐべし古用芽も出して十分に生かば置
 其まゝ並たて糞と澆ぐより一季かり命根と曰す斗り残

先と切りてはあまぐ澆ぎてより白根を生しける比本植は
 ○海棠林檎橘桐堂たんつじ等ハ根を六寸にきり切口をたれ
 出しう名並ハ芽を生するなり芳場二月の末より三月のうちに
 根をきり植並ハ芽を生しける

○山茶む茶梅の類ハ盆栽ハ花付る付りて茶芽の如くま
 る時を乾燥し糞汁と澆ぐべしあを乾りて糞汁と澆ぐ時
 を根小痛みぬる夜ふ古用芽出せりて花蕾となる

○發蕪下り木を試みるに四方重きよよと根きく水乾きくる夜は
 梅根の多しと知るべしそてのふ我好むぬる芽を生せしめん
 思ひばれぬ枝芽と出さんと思ふぬの鱗をニツニツとぐし並へし其ぬ

より必し芽と出はる

○竹城栽るゝ木古より赤土の昔より上根の堀りたるべし上の礼
根より大幹を生せし又木のきりかたの堀りてす竹林のむまを
と多くつるれは上根腐りてす

雪霜忌避の事

凡園中の樹木冬月雪霜の候傾ゆ其法と施して枝系とてを
凍死と防ぐべし○花鏡云凡生果花盛時逢霜則無實志のみに
何れは雪の為は枝を移り芽を換むるも何れは十二月の中に雪中の
樹木の弱き枝は下より竹とたて結垂又細き繩をて釣垂へし若狭
りてを折さるるもたし小本枝多きりの杜松茶藨金松古藤木の

二種の根繩にて巻かへし種株を蒸れし立冬の次より葉を
まくべし又葉類の盆栽をすす種を埋垂て表の波層比より堀り

せしてより地埴のりのりり本葉をたかけ垂てより○在任安
ふ戒人の説ふ山中のりのり雪をた除くもたすして自後
より園中へ移す時ハ根をよとつり左ふりて冬月深し

切きたるに葉落て根下ふりより一尺もかきわけて漸く下に生する如
雑草とゆるり造物自後之妙して自ら根のたきと避くるあり

樹木と伐る事

草木葉落して山林へ入ると樹木を伐て人用と為るといふも又
時ふりてこれ伐るるもたすしそ枝をそとるはたす月念也

きうたすういあよを切るなりきう口の合ぬ格とするなり又法
本ももに皮を剥きを用ふるのハまかより林分をよりけり皮
剥易くしては杉木扁柏黄蘗山椒等なり○在任按は桑の
辺よりシナの皮を剥き用ふるにハ桑木のまより切らず又堅
小切りてそま、剥き取くとまより引たり格より格まで剥
ありこれと水に浸し布で織り又繩と成

大樹よん改めり

又云人家或ハ淫来の傍ハ大樹ありて大風来まハ時ハ樞柵乃於
中より折人としちあまよきハ人家も破るべし杉扁柏花柏等
格より倒進松ハ又より裂けるなり格より格より中より伐り枝乃

長きそまより不おぬの枝ハ伐りてつり合よき格よすべし何れど
暴風よもけりなり○在任按ハおに大樹をくして喬木一本の
雷の落る懸りともあり

盆栽之事

考盤餘事云盆景以凡案可置者為佳其次則列之庭榦中物也
花鏡曰至若城市狹隘之所安能比戸皆園高人韻士惟多種盆
花小景庶幾免俗然而盆中之保護灌溉更難於園圃花木燥濕
冷煖更煩於喬林○在任按ハ盆中ハ実ハ力満じて書ハ
練ハ干ハ葉ハ奇ハ木ハ盆栽リ一葉ハ重テ愛玩する友
紀水時と記乾濕を性ハ湿ハふれば是ハ枯朽ハあり○灌園法云

粗くうづらんと俗におられたと名づくを法ハ先竹篩と二通りあり
 藁へ粗くうづら目や選子の大き中より大の大豆の大き細小の緑豆と
 する位お他へ一は竹篩より過るるに用ひて地ぬく土と二通り
 極く重く栽物の用とす蓋の底へ大ひきると入建し中より入れ
 赤小豆位の大きと以て栽松蘭百両金等け法とす一は法方除
 山のりぬ法より又牡丹も山と一丈斗りも堀りそそ栽肥を多く焼
 ぐ時ハ勢より一〇九を蓋栽土の上層とりのハ蓋土の赤とりののちり
 江戸地方をて青山菜鴨辺の土をう極めてまきハ水を合みて口
 菜園をとり去る月糞汁と焼きおいてそを蓋栽お妙なり下
 谷辺溝土ハ搦州刺の茶より一七て州木と蓋お極るよハ本とす

よりち四方より土と入建竹のちりまで指入鉢のちり一付ぬ指おほ
 土と蓋のちりをとせとんと一通下へおてまきおてよ一土とが
 付るのりり一又すにあとまき焼くわりり一ちりてか一焼き
 て重べ一雨おりりりり夏木ハ表方茶おちちりてよ一茶お
 を多く木おハ二季と過おばちちりてよ一は土指の先とせ切ては
 ○深山のりぬと栽るよハ赤土一升竹林の土二升の砂六合と水と
 煉りおろち小こ一と栽てよ一
 ○石葛ハ溝のりぬと栽と雑一升小二と度ちちりてよ一を指
 と切り去るべ一

瓶花挿種と事

考盤餘事云堂供須高瓶大枝方快人意若山齋充玩瓶宜短小
 花宜瘦巧最忌繁雜如縛又忌花瘦干瓶須各具意態得畫家寫
 生折枝之妙方有天趣○在仕插日古人瓶花之設枯坐一色生瓶
 方きに思ひず四序と一瓢小葦ゆ干林と才窓小挿るやう花鏡瓶
 史其養法と云ふものよと色皆自ら試みるに或は養ひ難きもの
 あり今々不意州流の極秘の法と云ふ以兩之花旁刀州野茨菰
 素吾人の數を切々惜く重ておく和らぎたる時淋湯小瓶と一
 寸斗り浸し更とさう捨て用ふべし竹の枝々下の葉より下二寸
 程結しさうこれと菅の根を燒き更とさう捨て冷水を浸しを系
 り毛冷めと洗ぎおし過て用ふべし牡丹芍薬飛八仙水蔓草皆

根を燒切りすて冷水に煮ふべし葉は根と二寸斗り楊枝の如
 くききて燒きすて酒に浸し煮ふべし外の蔓草も同じ
 菊の根を根とさう川芎と一斗をさみてさうを水に細末を入れて
 もよし蓮心椒と甘草と能き茶を煮出根より皮込茶乃
 房の根を煮よと結びてさうを煮る茶にあらと洗きてさう
 ○喜任云本州綱目云花瓶水飲之殺人臘梅尤甚考盤餘事云
 梅花秋海棠瓶水有毒又建業瓶水有毒何するに六雜俎にさう
 變花催花の法

凡花の非時不發くりの養花といふ亦温棚をて開くも
 亦堂の唐むらさきは是助け長するの類といふも亦於下護ひて

子きく以壯教とて花鏡曰以紙糊密室鑿地作坎繩竹置花其
 上糞土以牛溲馬尿硫黃盡培溉之功然後置沸湯於坎中少候
 湯氣熏蒸則扇之以微風花得益然融淑之氣不數朝而自放矣
 是近時の穴蒸の法也似く梅橘桃李於く春暖の氣を以て發く
 りのを皆此法より一おの壺かみの別してより一其法は日あ
 たりれ山の横へ横穴を掘り形竈に數尺入口狭くして三四尺斗り
 中間を四五尺の廣さたり中櫃竹とゆみく棚をつり上に懸垂
 ぶちとくきとく一盆栽とて霧と吹け棚の下へ炬火を燃て
 もろく穴の口は寒くとれは温を昇りて俄然花開くまうゆれは
 大陽乃光とゆさるぬるる色落し日かゆてる時ハ色と生むるたり

山の麓をてゆるべ一平地をてハ云とて三方ゆるもより
 あり成絶えころ格よとべ一ありるる時ハ立地不枯也
 蒼苔落つ根もあど多く澆ぎてより



信正圖

花日小満るるも紙を痛てある方より又薦りてちひされ小令
 と作り竹と瘦みく棚じよ樹を並へ四方のこものぬじこも
 りて口を塞き下へ剛炭と大炭燵か入せむふ膏と吹つけず時の
 有毎このもと花とくまりと吹べーかーもても乾くと此の蒼落
 る方より一日一夜りて幾くあり○泰崎氏云西洋人某陽陽
 て冬月西瓜を作らんとして冬の大陽の處る地小穴と堀りこを升り
 西瓜の苗種名培蓄力とあり下に硝子乃硝子と籠りこを油
 紙一葉角く書いりり冬月小満るに果して一瓜と結び大も十
 分皮の色深緑をたりくれは某大いよ花び目とトして人成振き
 右の西瓜と出ーこれを食せんと割りこりに外皮と六八はふらひて

瓢を白色なり味は更ならずこや人かよて大陽の光力といつ
 され果もむも十分れ香色ハナト唐む只一時目と表をすのこ
 なる○又翠藍桂川先生の説は西洋にてガラスホイスといふりの
 作りて硝子と以て果木と覆ひ書いて冬月蒲菊と漂流の人よ
 食せりりゆりんと

班系間道と事

邦俗はは系といふの古ハ是と電玩するもは、近來享保
 の比より世も電玩する人あり今ハこれを班入りといふ戸も電玩せざ
 るハナリ、是ハよハ班ありといふハ杜衡の教也よハ班入といハ一
 又瑞香乃其の系の周圍ハ白色なるを指辺といハ美色あると

合辺といふ玉簪萱州の類條日筋の如く縁後すく同方といふ
 ○澆園先生云白色を志るふといふ黄色なるを黄班といふ初葉
 後白色なるは後さといふよ赤なり葉の葉白く班有りて杖
 斑の如き白を後さといふ下品なり又赤けめの如くは
 何んか赤き邊といふ葉中にのみならず中斑又中かえといふ紫の
 邊縁色なるは赤邊縁といふ因くおやしたるとがたかといふ小田
 燕又細白燕何れと種子といふを弁干變万化逆件するはよい也
 まゆは斑の類葉の人の癖風の内毛の何れは斑よ玉邊ハガ多乃人
 りても白髪と赤るが如く一斑ハ実生よりも性又一枝偶然班葉に
 なるも何れも自然は出るりのたれは深ふもゆるりのありと○又近來

花葉の悦花乃雌雄葉なり雄本雌本なりと花葉交接の備
 ようて考ふる不詳を六粒或は葉蕾ハ班入りて又別種の葉蕾
 班と生せしめんと思つて花のむ開く比ハ班葉の花粉と振蕩
 く葉を結びつるを揉りて前ハ班の奇粒と約べ○森任按
 小今花戸よりハ班入り各の稱呼あり芽の出る比ハ赤とあるは
 斑といふ葉葉は極ふんえうにハ班のえゆるをのげふといふ
 この赤と接木と又赤を入て赤の上と班とあるは子なり又枝ハ班ありて
 赤の葉ハ赤く又赤乃枝ハ班ありとをさうといふ今辺鳥本毒を
 と折ぐ中にすぢの如くをけぬといふ○又本と班葉にするに奇法あり
 よく考へんはハ班下の葉葉といふの既薄根と殆としてあせり

根付芽と造てより丈一丈六寸

○若と蔓は其す空地、並に蔓も極座へ

予命深より採茶の若の中より

石のざる実生を採る

採茶の具ハ

新鋸刀竹より

石巻補の板より

平より一と一ツの挿り柄ハ揃て作り

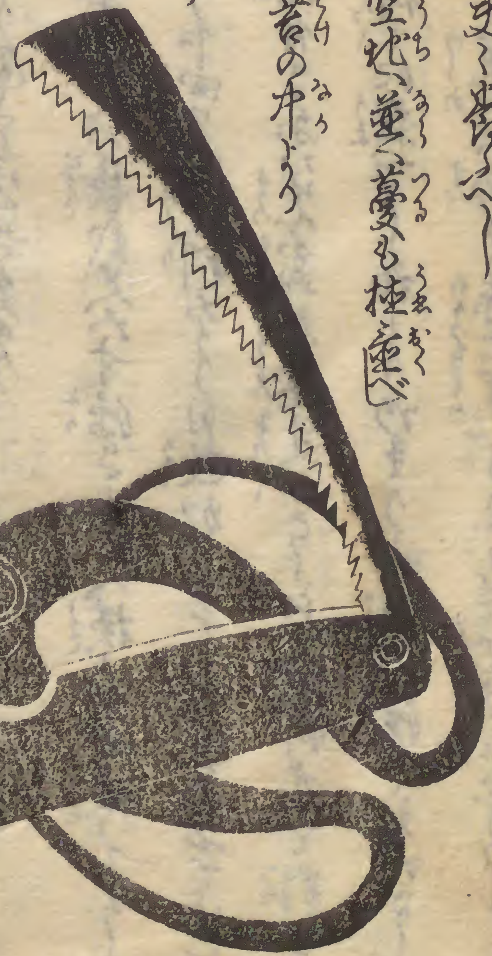
か一平みゆりこれものと為ふ為あり

そ人の杖の長よそより一の蓋を歩け

の時突きてけいこより一在成一ツより

是ハ若ふ時木の枝よそ一荷物乃

為るわたり



竹より
竹登りて竹より
とつふと竹を竹
と製する具あり
合はるすきこちと



幅一寸五分

新鋸刀

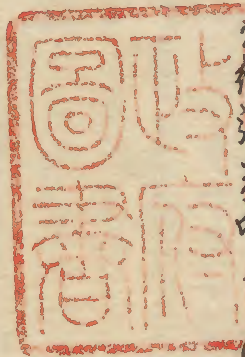
石巻補

平よりを採枝と
名解をよりなり
究つるものと法あり



草木育種後編

草木育種後編卷之上終



半紙のりをおと拭漆をうすく漆め
 細くきうて居らぬとたる札と捲り
 携へていへば根斗り又ハ落葉のりのも
 付る不便なり
 又此紙の代り紙を合のりのもさうしんを
 送ふまうひつる時のしあそび
 火櫃にわらぬるは行かへ

